

黒川温泉 HISTORY

1965 —
1985

黎明期の黒川

昭和40年代の後半まで日本の高度成長期が続き、車社会の到来も進んだことから、阿蘇や杖立、別府等の大型旅館のある温泉地は大繁栄を極めました。一方の黒川は、やまなみハイウェイの開通効果も一時的なもので終わり、「鳴かず飛ばす」の状態が続くようになりました。二度のオイルショックはさらに追い打ちをかけ、先の見えない空気が組合には充満していました。そんな中、昭和50年頃から、黒川へのUターンや婿入りが相次ぐようになり、30代を中心に2代目の青年たちが揃ってきました。

●主な出来事

黒川温泉の皆で叩く地元伝統芸「やまなみ太鼓」発足
竹田市にならい大名行列開始(毎年10月の第一日曜開催)
黒川温泉奥の院に「不動明王」を地元人寄付により設置

— 1964

組合設立の前後

昭和20年代まで、黒川温泉の多くの家屋は「かやぶき」でした。昭和30年代頃から、九州横断道路の建設のために、測量業者等の宿泊客が増え、それに伴って、旅館の開業や改築が増えていきました。1964年(昭和39年)、九州横断道路(通称 やまなみハイウェイ)が全線開通。黒川への入り込みも若干増えました。この頃、木造モルタル外壁の建物への建替が進み、黒川温泉の旅館は、湯治の宿から、温泉観光旅館の看板を掲げたスタイルへ、全体的な転換が進みました。

●主な出来事

1961年(昭和36年)
旅館組合設立
1964年(昭和39年)
九州横断道路(通称 やまなみハイウェイ)が全線開通

2001 — 2016

原点回帰へ

黒川温泉をマスコミで紹介される機会が多くなり、2003年(平成15年)には宿泊者数40万人、推定入込観光客数120万人のピークを記録。2006年(平成18年)頃から、3代目に相当する30代の若手が後継ぎとして経営に加わる旅館が一気に増え、組合の青年部も活気ある新チームの様相を呈するようになりました。2012年(平成24年)3月、「明るさと元気、原点回帰」をテーマに黒川温泉旅館観光旅館協同組合50周年記念式典を開催しました。

●主な出来事

2007年(平成19年)
入湯手形の販売200万枚突破
2012年(平成24年)
組合設立50周年記念式典

1986 — 2000

急成長する黒川

1986年(昭和61年)、組合組織を再編成し、若手青年部のアイデアをできるだけ反映し、即実行できる体制になりました。看板の統一や、雑木の植林、「入湯手形」の発行を開始したのもこの頃です。1993年(平成5年)、黒川を訪れたお客様が立ち寄る拠点施設「風の舎」(組合事務所)が完成しました。宿泊者数は、統計をとり始めた1989年(平成元年)に17万人、2000年(平成12年)には33.8万人に達し、入込観光客数も100万人を数え、黒川温泉が観光を浴びるようになりました。

●主な出来事

1986年(昭和61年)
入湯手形発行開始
1987年(昭和62年)
個人看板撤去・共同看板設置
1993年(平成5年)
組合事務所「風の舎」落成

地域と
共生する
FFG



黒川 温泉

わずか29軒の旅館と緑豊かな山々に囲まれた
小さな温泉地。一つひとつの旅館は「部屋」
であり、道は「廊下」。温泉街全体の風景が、
まるで一つの旅館のように。みんなで一丸と
なつて、「黒川一旅館」をつくり続けています。

寄稿：黒川温泉観光旅館協同組合

黒川温泉らしさを
大切にした
地域づくり

阿蘇くじゅう国立公園に接する黒
川温泉は、筑後川の最源流地域に位
置しています。田の原川が中央を流
れ、緑豊かな山々の自然に包まれた集
落環境と温泉観光地としての性格を
合わせ持っています。湯治場として、江



黒川温泉のスタッフ一同
写真提供 クラタニ写真工房

戸時代より遠来の旅の宿として利用されてきた歴史を持ち、その名残を残しながら、素朴な温かさが感じられる田舎らしい雰囲気づくりに地域ぐるみで取り組んでいます。

1986(昭和61年)年からスタートした「風景づくり」への取り組みは、30年が経過した今も試行錯誤しながら歩み続けています。現在では「緑豊かな山奥、ひなびた温泉宿、木漏れ日のさす露天風呂」を目当てに、多くのお客様が訪れるようになりました。

観光による収益が増大し、地域全体に雇用の拡大という経済的効果をもたらしています。地域の住民全世帯が加入する自治会が中心となって、観光と住環境の両立が図れるよう、環境整備や施設の運営のみならず地域コミュニティ全般の充実を図っています。これに伴い、地域住民の「風景づくり」に対する問題意識や取り組み意欲も向上してきました。

本稿では、地域住民の取り組みと、黒川温泉のこれまでとこれからを紹介いたします。







黒川温泉

お宿 全29軒



02 旅館 壺の井



01 いこい旅館



08 旅館 こうの湯



07 黒川荘 温もりの宿



06 お宿 玄河



14 お宿 のし湯



13 旅館 にしむら



12 旅館 南城苑



20 旅館 やまの湯



19 旅館 美里



18 帆山亭



26 旅館 湯本荘



25 夢龍胆 花泊り



24 夢龍胆



05 いやしの里 樹やしき



04 旅館 奥の湯



03 歴史の宿 御客屋



11 山の宿 新明館



10 旅館 山河



09 三愛高原ホテル



17 ふもと旅館



16 ふじ屋



15 お宿 野の花



23 湯峡の響き 優彩



22 旅館 山みず木



21 やまびこ旅館



29 深山山荘



28 里の湯 和らく



27 旅館 わかば



一軒で儲かろうとしても 一軒も儲からない

「一軒で儲かろうとしてもダメ。地域全体が手をつなぎ、黒川温泉の雰囲気をつくり上げていこう」。

黒川温泉では、地域全体が手を取りあつて、様々な取り組みを行ってきました。看板の統一、入湯手形の発行等、次々と考え出されたアイデアによって、現在の「黒川温泉」ができたのです。

緑を増やす活動

黒川温泉は自然がいっぱいで緑に包まれています。実は、この緑を増やしてきたのも、心地よく感じられるように維持しているのも、人の手によるものです。手入れを重ねていることの表れが、黒川温泉の緑です。

数十年前までは、背後のスギ山はあるものの、温泉街としては味気ない風景が広がっていました。そこで、山里らしく山の雑木を植えようということになりました。当時は露天風呂の風情演出が主でしたが、少しずつ道ぞいや旅館の建物の前面等にも緑を増やしてきました。植樹を始めた頃は、見せたくない建物や構造物を覆い隠そうとしていましたが、今では充分に成長し、黒川温泉の風景を語る上で欠かせない名脇役になっています。





黒川のランドマーク「風の舎」

1993年(平成5年)に落成した「風の舎」は、ビジターセンターとして、黒川を初めて訪れる方もまずここを目指す、というランドマーク(地域の目印)になっています。

「風」とは、方位を見定めながら、地域の特徴や固有の文化等を他の地域に伝える神のことで、「地域の趣や雰囲気」を表すものだそうです。ですから風の舎は、黒川温泉の情報発信基地であり、当組合の司令塔でもあります。美しい塔のある建築デザインには、そんな意味がこめられています。

最後に

黒川温泉では、多くの人に「ふるさと」と思ってもらえる風景を創ろうと、様々な手入れや工夫を重ねてきました。「地域づくり」や「風景づくり」には終わりがなく、常に「次はどうするか」を考え実践し続けなければなりません。

地元の人たちにとっては、「ここに生まれてよかった」と思える地域環境となるように。訪れる人たちにとっては、「また来たい」と思える美しい想い出の場所となるように。

これからも、心のこもった「もてなしの風景」を目指して歩み、ここにしかない環境を受け継ぎ、皆で協力して育てて参ります。





